

勤務医部会だより

岡崎市民病院を取り巻く医療情勢



幹事 早川文雄

(岡崎市民病院院長)

岡崎市は愛知県のほぼ中央に位置し、人口39万人の中核都市です。医療圏は、隣の幸田町と合わせ43万人を対象とする西三河南部東医療圏に属していません。岡崎市民病院は当医療圏における唯一の急性期総合病院として、創立以来140年にわたり地域中核病院の機能を担ってきました。昨年、現在地に移転して20年を経ましたが、この間、前任の木村院長（現：名誉院長）時代に西棟と救急棟を増設し、715床まで増床しました。救急搬送件数は年間1万を超え、救急対応能力を養うなら当院でと、多忙を厭わない活きのよい研修医が、毎年15名ほど集まっています。

当院は岡崎市の中央に位置しますが、市西部や南部にお住まいの方は、通院に1時間ほど要するなどの理由で市外の病院を利用される割合が高く、当医療圏住民の約1/4が市外の医療機関を受診するといった状況です。岡崎市はこの現状をよしとせず、藤田医科大学岡崎医療センター（以下、藤田岡崎センター）の誘致に動きまわりました。藤田岡崎センターは令和2年4月に400床の急性期病院として開設予定で、本市南西部患者さまの域外流出に対するクサビとなっただけなく、大いに期待されています。

藤田岡崎センターは三河地区で初の大学病院として華々しく宣伝され、市民の皆さまから大きな期待を寄せられていることから、当院も大学病院と同等あるいはそれに優る医療を提供しなければ、住民から選んでいただけない時代が到来するわけです。市人口の大半が密集する市街地からは、藤田岡崎センター・安城更生病院・当院の三者へ通院に要する時間はほぼ同じで、とかく接遇面の評判が芳しくない当院は、劣勢を挽回しなくてはならない状況に陥っています。

当院の西、直線距離で0.5kmほどに愛知県がんセンター愛知病院があり、同院はがんと結核など政策

医療に特化した県立病院です。愛知県は以前から愛知病院と岡崎市の連携を模索してきましたが、このような医療情勢から両者は同院の岡崎市移管に合意し、覚書が平成30年度末に締結されました。当院と愛知病院は共にごん診療を分かち合ってきた過去を清算し、互いの短所を補い合う統合に向かったわけです。すなわち、岡崎市民病院が手薄であった肺がん、乳がん、骨軟部腫瘍、緩和医療の部隊を市民病院側に移動させることにより、あらゆる領域、あらゆるステージのがんを一体的に市民病院で対応できる体制を作り上げました。これまでの愛知病院は、患者急変時の対応や全身合併症の存在といった制約により、複雑な患者の受け入れ困難が課題でしたが、それらの対応が万全にできる市民病院で診療することにより、受け入れ範囲が大幅に広がったわけです。がんチームが市民病院に移った後の愛知病院は、当院のポスト・アキュート、サブ・アキュートを担当する軽度急性期病床として、後方病院への転院待ちや在宅復帰支援の機能を担います。こうして、令和元年度から岡崎市立愛知病院と当院が岡崎市病院事業にセットで組み込まれ、強い連携と協調のなかで両院が運営される運びとなりました。

当院は愛知病院移管をバネにごん診療強化の機会を得て、来年度に開設される藤田岡崎センターとの競合、役割分担、連携に臨んでいくわけですが、当医療圏の根本的な問題がそれで解決するわけではありません。当地区は圧倒的にポスト・アキュートを担う地域包括ケア、回復期や療養型病床が不足しているのです。したがって、当院と藤田岡崎センターが協力し超急性期医療の域内完結を実現させても、ポスト・アキュートを担う医療資源や社会資源が不足のままであれば、結局は市民の地域包括ケア域内完結が実現しなくなるのです。今後の急性期病院は、地元医療機関や福祉施設と必要な情報を共有し、いっそう強力な連携関係を構築していかななくてはなりません。

このような状況のなか、岡崎市民病院は市民から「選ばれる病院」を目指して改革を進めています。スローガンは「届けよう笑顔と思いやり、築こう人が輝く病院を！」です。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、伏してお願い申し上げます。